

No.50 ジョゼフ・コサース 「呪文、ノエマのために」 Joseph Kosuth

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年 11 月 1 日付 立川市市報記事より

最近、「水俣・東京展」があった。発見以来 40 年、公害の原点ともなった水俣病は、その運動の高い質を持って現代文明を告発し、なお、高い文明的結晶を生み出した。石牟礼道子の「苦海浄土」や「椿の海の記」は、近代日本文学の最も美しい作品の一つである。

この「椿の海の記」の事と 20 世紀文学の父といわれるアイルランドのジェームズ・ジョイスの「若い芸術家の肖像」の一節を、英和両言語で車路の壁に 40 メートル 2 段の 2 千文字で石に彫り込んだものが、ジョゼフ・コサースの作品である。彼は美術がこういうものだと決められ、それが見る目をも規定していることに対して、もっと視覚は、自由であるべきだと考え、文字だけの作品を作った。

視覚を変えたといわれるコサースの仕事だが、この壁を見ると実に美しく、やはりたぐいまれな作品だと感嘆してしまう。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

私のインスタレーションのタイトルは「呪文、ノエマのために」です。

それは石牟礼道子「椿の海の記」とジェームズ・ジョイス「若い芸術家の肖像」の和英テキストを重要な構成要素としております。

これらのテキストは、カバーしたネオン管による間接照明を当てられコンクリートの壁に直接彫り込み、サンドブラスト処理を施す予定です。

照明をあてたテキストの長さは42メートル近くあり、2行にわたります。

作品は1歳半になる私の娘ノエマ・コサースに捧げられています。

作品には何層もの意味がありますが、そのいくつかについて述べてみたいと思います。

まず、第1の意味のレベルは、テキストの書き手の選択に表れています。

アーティスト、つまり私は英語で考えながら日本で制作するために、日本人の作家と英語で書く作家を、一種の懸け橋として選びました。

ジェームズ・ジョイスは私と同じ知的伝統に属しています。

石牟礼道子は、ジョイスと同様の尊敬に値する文学的コンテクストを代表する作家として選びました。彼女は又私たちすべてが必然的に、絶えず思い出していかなければならないエコロジー運動にかかわっており、自らの政治的信念を芸術へと両者を妥協させることなく高めています。そして最後に彼女は女性であります。

女性の文化への貢献が社会的ダイナミクスの理解可能でごく自然な均衡の回復の一部として、また私たちの種の生存本能の一部として、男性の貢献を凌駕する時代に私たちは入りつつあると私は思うのです。

テキストは精神の機能の多様性という事で選びました。

テキストの意味がどのような方向に向けられているかは両テキストを並置することで、ある程度構造として示されています。

二つを合わせた“全体”の意味は それぞれのテキスト以上に(そしていくらか)異なるものです。このように私は、“すでにできている”テキストを使って著者が選んだ方法で、制作するという事ができます。

つまり、テキストは自らの意味を作り出すために(それ以前に世界に存在していた)他のテキストが作り出した言葉を選ぶのです。ひとつひとつの言葉によって制作する代わりに私は文と節を使って制作します。

たとえ言葉が私のものでなくても、意味は私のものです。

この作品の場合、意味ははっきり異なる二つの方向に分かれます。

一つの意味は、外、つまり世界における作品の解釈へと向けられており、文化的伝統(私自身のそれも含む)の一部としての作品の、境界及び位置を語っています。

もう一つの意味は、私の娘へのメッセージ` (そして祝福)として、内、へと向けられています。最後にパブリックな作品として見る人が作品を完成させ、作品の意味の創造に参加して下さることを願っています。